

樹木画の全体印象と高校生の不適応行動との関係

——バウムテストを中心に——

一 谷 彊・横 山 基 弘

Relationships of Maladaptive Behavior of Senior High School Students to Whole Impression in Tree Drawing Patterns with Reference to Koch's Baumtest

Tsuyoshi ICHITANI and Motohiro YOKOYAMA

Received April 30, 1979.

I. 導 入

今日、高校生に多発化しているいわゆる不適応行動については、学校教育の場に限らず、広く重要な社会問題となっていることは言うまでもない。そうした点で、教科学習指導や生徒指導の立場にある教師は、高校生活にみられるこうした生徒の行動に日常深い関心を寄せ、生徒の指導に心をくだしている。

この報告では、そうした不適応行動の初期的徴候をできるだけ早期に発見して、生徒の指導助言に資することができるようにとの発想のもとに、具体的には、Koch の創案になるバウムテストを用いて生徒の不適応行動の徴候がそこにどのような形で投影されるかをみていこうとする。

このことを今少し詳細に言及するならば、学年始めの当初に、生徒にバウムテストを描出させ、それを当分の間は一切ふれることなく保存したのちに、ある一定の期間をおいてこれらのバウムテストの資料に目を通し、不適応行動のみられた生徒とそうでなかった生徒とのあいだに、バウムテストにみられる樹木描出パターンにどのように差異がみられるかを、生徒の情報的一切提供することなしに、高校の教師に評価させた樹木描出パターンとの関係から吟味してみようとすることになる。

さらにいえることは、一般に、教職の現場にある教師としては、このいわゆるバウムテストに精通しているわけでないから、できるだけ現場に即した樹木描出パターンの判定基準を設定

して、不適応行動との関連を模索してみることになる。このようなわけで、生徒指導に強い関心を寄せるとともに、なんとか不適応的行動に早期に対応できて、大事に発展するまでに、生徒に相談・助言できる緒口を見出したいと考えている何名かの教師の協力のもとにこの研究は進められた。その点、いわゆる心理検査といわれているものに熟知しなくても、このバウムテストが適用可能なように検討を進めていこうとする側面のあることもここにあらかじめことわっておきたい。そうした点では、本来の Koch の精神から多少逸脱したところのあることも否定できないが、とにかくにも、できるだけ教育実践の場に広く適用できるようにすることが可能かどうかを吟味検討するという含蓄をもってこの研究を試みたわけである。

Ⅱ. 目 的

K. Koch の考案したバウムテスト (Der Baumtest) にみられる高校生の樹木画描出パターンの教師による全体的印象と、不適応行動——ここでは具体的に、主として集団からの逸脱行動としての反社会的行動が中心となっている——との関連について吟味検討することが目的である。

Ⅲ. 方 法

1. 被験者

昭和50年度に入学した大阪府立 K 高校全日制生徒男女併せて164名、大阪府立 N 高校定時制生徒男女併せて120名、合計284名で、男女の比率はおおむね半々である。

2. 手続き

全日制生徒4クラス、定時制生徒3クラスについて、入学時にほぼ相当する4月～5月中旬にバウムテストを実施、これらのクラスで、ホーム・ルームや学習時における行動観察を2年間継続的に実施した。

なお、これらの実施にさいしては、本研究報告者のひとり横山のほかに上記のクラス担任と、国語・社会・芸術・体育の各教科からの授業担当者各1名ずつが協力者となった。

(1) バウムテストの実施

先にも触れたように、バウムテストは、体育の授業時間を利用して学年初めの4～5月中旬のあいだに実施した。

実施にさいしての教示は次のようである。「これから、想像して木をかいてください。原則として1本です。」また、「想像してかくのであるから、どんな形になってもよいが、しっかりとした形でかいてください。時間は大体30分くらいでかいてください。」(30分程度でかけないときには、10分間延長した) などである。

一般的には、「実のなる木を1本かきなさい。」とか、「木の絵をかいてください。木を1本かいてください。」というのが普通である。これについては、我々の場合の教示に別段深い心理学的根拠があるわけではないが、テストへの導入の過程として、なにか心理的にテストされ

ているとか、これはテストであるとかのような、絵をかくことについての困難性や不安を少しでも解消するための手段として、想像上でかかせることにより、経験的には、絵画的表現の上手・下手などについてのこだわりや抵抗感を徐去する手助けにはなっているように思われたのである。その他の点については、K. Koch の原法に忠実に従った。

(2) 行動調査における項目

行動観察ないし調査のための項目の選定については、協力者について言及したさい述べたように、国語・社会・数学・体育・芸術の各教科（これらのうちにホーム・ルームの担任も含む）からの合計6名の教師によって検討を加えた結果、

① 出席状況

② 学習態度（真面目か不真面目か。）

③ 活動性（ホーム・ルーム、体育授業中などにおいて、規律正しく活動をするか、無規律的活動をするか。）

またホーム・ルーム担任においては、父兄懇談会などで、

④ ア、家庭でよく手伝いなどをするかしないか。

イ、帰宅したら家の中でよく本を読んだりするか、すぐ外出するか。

ウ、外出するときは帰宅時刻を守り、行き先などをいうかいわないか、また時刻を守るか守らないか。

これらの3点を中心によく聞いて評定することとした。

⑤ 生活指導面からは、学校独自で作成している内規集（大阪府立の高等学校においては、現在のところほぼ共通したものである）に照らし合わせて、極端に違反・反則して補導されたり、停学等の指導に服したことがあるかどうかについて調査。

以上の5項目を中心として、2年間にわたって調査・観察を行ない、特に良好であったものと、特に注意を要するものを選択した。

これらの調査項目の作成や選定にさいしては、多くの論議をよんだが、個々の被験者のプライバシーを犯さないよう充分に配慮することで意見の一致をみ、実施することとなった。従って、バウムテストでの樹木画描出パターンと、行動調査から得られた結果との、それぞれの被験者での対応関係については、本研究の報告者以外には一切知らされていない。

なお、上述の調査項目については、理論的にはなお種々の問題点のあることは否定しえないが、この報告では、むしろ、実際的な教育実践の場にある教師が、最も手短かに、しかもさほどの時間的労力を必要とすることなしに比較的客観的に調査・評定可能な、実際的なものを選んであることをことわっておく。

(3) 樹木画の全体印象についての基準的評定項目の作成

まず、高校生の年代にみられる描写の特性としてあげられるものは、V. ローウエンフェルド著、竹内・堀内・武井共訳（1974）「美術による人間形成」（名古屋：黎明書房）の中では、「外部の調和」、「表面の外観」、「光と影の視覚的な解釈の強調」、「瞬間の印象の描写」、「外観と対照的に内的な感情の強調」、「性格の描写と、時に象徴的特性の表現」、「距離に伴う明暗の変化」、「水平線の意味」、「三次元の特性の強調」などであるとされている。また、絵画表現における方法についても、「表現方法を生活にあてはめて考えてみれば、もし、線が生きている

ものだとする、それは動くだろうし、もう1本の線と友だちになったり、どこかある場所をたずねていたり、興奮してとび上ったり、とびおり、また静かに休んだり、歩いたり、はじめから定まった場所へまっすぐ行くようにして、忙しく働いたりするだろう。それは環境を支配したり、あるいは環境の一部となったりして、環境とのあいだにある一定の関係をもつようになるかもしれない」(pp. 67-68)とされている。

同時に、絵画・描写における基本的なものとして、明暗・量感・動勢をとらえることは、絵画指導上の過程としては定説となっているとされている。明暗からは立体的な表現が描かれ、量感からは豊かさが生まれ、動勢からは生命力を得るものと思われると考えられてきているのである。

こうした叙述は、部分的には K. Koch の形態水準や動態水準に示唆されるものと共通した側面を示唆するものがあるようにも思われる。

このようにして、コッホ (K. Koch) 著、林・一谷・国吉共訳 (1973)「バウム・テスト——樹木画による人格診断法——」(東京：日本文化科学社)にみられる基本的概念として、『空間的象徴』、『形態水準』、『動態水準』の重要性にみられるように、画用紙全体の上に表現される樹木全体から受ける印象についても、性格的特性を理解していく手がかりを得ることができるであろうことが示唆的に強調されてきている点は注目に値するものと思われる。

それに加えて原著者とその訳者などが重視している58項目を基準にするとともに、横山 (1977——関西心理学会)が高校生396名を対象として描かせた樹木画を分析した結果、高校生の年代として一般的に描出される率の高い項目、「二線幹」、「二線枝」、「実」、「葉」、「幹部にこぶ・ふくらみ・ぎざぎざ・刻み目をつける」、「三次元——眼なし」、「風景」、「付属物」などに加えて、すでに先に記述したような絵画指導面での要点なども考慮した。

すなわち、今回この報告でとりあげようとする、全体的印象を中心とした12項目(これについては後に詳述する)は、絵画指導で性格的特性が強く示唆されるとされている「明暗」、「量感」、「動勢」、及び「線の使い方」を中心とし、それにバランス的要素を加え、高校生が一般によく描くと思われる側面を加味したうえで、精神的発達を示すであろうと思われる幹の処理のしかたをも加え、さらに、林・一谷著「バウム・テストの臨床的研究」(1973, 東京：日本文化科学社)の研究的示唆を基礎として作成したものである。

こうした示唆的基準に加えて、実際にこのバウムテストに初心者のなものであっても、全体的印象から、比較的評定しやすいような項目であって、しかもなおかつ、できるだけ、個々の樹木画について、評定者間に一致度がみられるような項目を選定した。

このようにして選定した全体印象に関する基準項目は以下の12項目である。すなわち、

① 樹木全体の「バランスがとれている～いない」

説明：画面にえがいてある樹木が、画面の左右、上下に対して均衡を保ってえがかれているかどうかである。

② 樹木が「のびのびとした形でえがかれてある～ない」

説明：幹の先端が上を向いてのびていることと、枝が外に向かってのびていること。

③ 樹木の中の「付属物及び風景がえがいてある～ない」、えがいてある場合、「目立つ～目立たない」

④ 幹に異常な「ふくらみ・くぼみ・曲りが目立つ～目立たない」

説明：幹のふくらみ・くぼみについては、幹の基部を基準にして、その太さよりも幹の輪郭線がふくらんでいるか、内側に深く入りこんでいるかについてみる。幹の曲りについては、画用紙の縦軸に対して大きく左右に振れて幹がえがかれているか否かをみる。

⑤ 幹の先端の処理については、

(ア) 幹の先端が「開いている」(開放)

(イ) 幹の先端が「完全に閉じている」(閉鎖)

(ウ) 幹の先端が「不完全な形でえがいてある」(不明確)

⑥ 樹木が「ゆたかに表現されている～いない」

説明：ゆたかさについては、幹・枝・葉などが、立体的・量的表現でえがかれているかどうかをみる。

⑦ 樹木が「自然に近い形でえがいてある～ない」

⑧ 樹冠が「きめ細かくえがいてある～ない」

⑨ 幹と枝とが「しっかりした形でえがいてある～ない」

説明：幹と枝とが一連の線(連続線)をもってえがいてあることで、接触(つぎ木的)とかハンダづけした形でえがいてあるものではない。

⑩ 樹木が画用紙の中に「おさまっている～いない」

⑪ 樹木を「ていねいにえがいている～いない」

⑫ 幹の太さが「太い～細い」

説明：幹の太さについては、今回は、樹木全体が画用紙の中にしめる大きさ(太さ)から判断した。今回も、これまでと同様、6cm(5指のうち、中の3本の指の幅程度の太さ)以上のものは「太い」と判断し、1.5cm(鉛筆の太さよりも少し太い)以下のものは「細い」と判定することとした。

(4) 樹木画の全体印象の分析的評定

樹木画の全体印象の分析的評定にさいしては、上記の12項目について、5段階法によって行なうこととした。(ただし、のちの具体的結果にみられるように、項目によっては二者択一的評定や三件法による評定を行なった項目もいくつかある。)なお、生徒のえがいた樹木画には、それぞれ、一応樹木の名前を書かせておいた。

(5) 被験者の選択

すでに行動調査の項で記述したように、これに基づいて、被験者全体の中から次の3群を選択して構成した。すなわち、適応良好群、適応退学群、適応不良群である。これら3群の記述的行動特徴は次に示すとおりである。

適応良好群：学校、家庭生活において、よく規律を守って生活する。学校では欠席はなく、学習に積極的に取り組み、よく努力し、どの教師からも良好な生徒と認められている。家庭においてもよく手伝いなどをし、通常よくいわれている「良い子ども」、「良い生徒」として認められているものである。

適応退学群：学校における生活ではなんら問題はないが、家庭においては本人が中心になっ

て生活や家庭の経済的な援助のために手助けをして働いているため、欠席が多くなりがちの状態となっている生徒からなっている。このように、学校でも家庭でも各面において適応的積極的であるが、経済的理由などのためにやむをえず退学せざるをえなかったようなものである。

適応不良群：学校、家庭生活において規律に違反したりみだしたりし、不規則な生活に毎日を過しているもので、学校生活では理由もなしに欠席がたいへん多く、学習態度は意欲に欠け、消極的である。しかし、身体を動かすような学習については、たいへん積極的にとりくむような側面もうかがえる。喫煙、単車にのりまわす、マージャン、サボタージュ、暴力などの行動が目立ち、生活指導を受け、謹慎などの指導をされているものが中心となっている。

これらを、最初に述べた計 284 名について 2 年間にわたって観察ないし調査したもののなかから抽出した結果、適応良好群 9 名、適応退学群 6 名、適応不良群 14 名となった。いずれも男生徒のみであった。

(6) バウムテストとの対応づけ

入学当初に実施したバウムテストは、行動観察ないし調査の期間が終わるまでの 2 年間は、全然見ることなく保管することにした。これは、バウムテストにみられる樹木描出パターンからの予断的判断の関与を回避するためである。そして、2 年後に、行動の調査・観察の結果抽出された被験者のえがいたバウムテストを抽出することより、行動パターンとバウムテストを対応づけることとした。

今回の全体印象の評定にさいしては、すでに述べたとおりの 6 名の現場の教師により実施された。なお、いうまでもないことではあるが、それぞれの抽出被験者の行動的特徴とバウムテストでの樹木描出パターンとの対応的情報は一切知らされていない。もちろん、抽出された被験者の氏名なども一切知らされていない。

IV. 結果と考察

以上に述べてきたような方法に基づいて資料を分析し、吟味検討した結果について報告し、若干の考察を加えることにしたい。

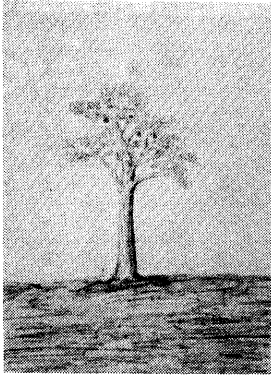
1. 評定者間の一致性

図表 1 から図表 3 までは、それぞれ、適応良好群、適応退学群および適応不良群のカテゴリに入る生徒 2 名ずつのバウムテストでの樹木描出パターンと、それに基づいての 6 名の評定者の 12 項目（既述）にわたる評定結果の分布の状況を例示的に示したものである。（これらのそれぞれの図表の見方は、図表の下（注）を参照のこと。）

これらの図表 1 から図表 3 をみても次のようなことがうかがえる。すなわち、全般的にみて、それぞれの樹木画についての各項目の評定の分布にはそれほど大きなずれや散らばりを見ることはない。しかし、特定の樹木画の特定の評定項目については、ときに、評定がかなりのばらつきを示すものもある。たとえば〔図表 1－2〕の生徒 2 の場合の評定項目 7「自然に近いかたちでえがいてある～ない」（5 段階評定）の場合などはこれに該当するもので、評定

〔図表1〕 適応良好群の生徒のパウムと6名の評定者による評定結果の分布

〔図表1-1〕 生徒1の場合



項目 \ 評定	-2	-1	0	+1	+2
1	0	0	0	3	3
2	0	1	1	3	1
③	—	—	—	—	—
4	0	0	2	0	4
⑤	—	—	—	—	—
6	0	0	2	0	4
7	0	0	0	3	3
8	0	0	1	0	5
9	0	0	0	1	5
⑩	—	—	—	—	—
11	0	0	0	1	5
12	0	1	5	0	0

〔図表1-2〕 生徒2の場合

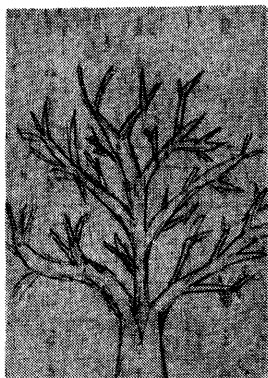


項目 \ 評定	-2	-1	0	+1	+2
1	0	0	1	1	4
2	0	0	1	2	3
③	—	—	—	—	—
4	0	1	2	1	2
⑤	—	—	—	—	—
6	1	1	1	0	3
7	2	1	0	2	1
8	0	1	1	2	2
9	0	0	1	1	4
⑩	—	—	—	—	—
11	0	1	1	2	2
12	0	0	4	0	2

- (注) (i) ここに提示したパウムは、適応良好群の生徒として抽出した9名のうちの2名について例示的に示したものである。
- (ii) 評定結果の表については、項目1～12は、評定の基準項目としてすでに本文中で記述したものと対応している。
- (iii) これらの評定項目は、5段階評価を主としたため(+2)～(-2)の範囲で行なわれているものが主体となっている。
- (iv) 評定項目中、○印を付したものは、「あるかないか」のように、二者択一的または三件法的評定を行なったためここでは頻数は省略されている。(詳細については表4を参照のこと。)
- (v) 各評定項目について、それぞれ6名の評定者が評定しているので、頻数の合計値は6となっている。
- (vi) 以下にかかげる、適応退学群(図表2)と適応不良群(図表3)についても、上記と同様の観点から参照のこと。

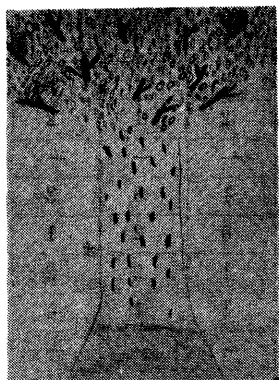
〔図表2〕 適応退学群の生徒のパウムと6名の評定者による評定結果の分布

〔図表2-1〕 生徒1の場合



項目 \ 評定	-2	-1	0	+1	+2
1	0	0	3	2	1
2	0	1	1	3	1
③	—	—	—	—	—
4	0	0	3	2	1
⑤	—	—	—	—	—
6	2	0	2	2	0
7	2	1	1	1	1
8	2	1	0	3	0
9	0	2	1	2	1
⑩	—	—	—	—	—
11	1	2	2	1	0
12	0	0	3	2	1

〔図表2-2〕 生徒2の場合



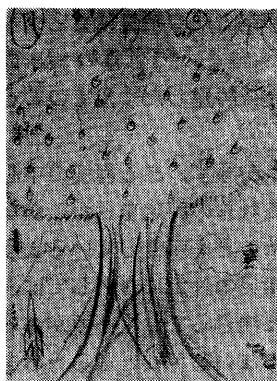
項目 \ 評定	-2	-1	0	+1	+2
1	1	2	1	2	0
2	1	3	2	0	0
③	—	—	—	—	—
4	1	0	2	0	3
⑤	—	—	—	—	—
6	1	0	3	2	0
7	3	3	0	0	0
8	1	0	2	2	1
9	3	2	1	0	0
⑩	—	—	—	—	—
11	1	0	4	1	0
12	0	0	0	2	4

(注) (i) ここに提示したパウムは適応退学群の生徒として抽出した6名のうちの2名について例示的に示したものである。

(ii) その他の詳細な図表の見方については、図表1の下欄に示されている(注):(iii)~(vi)を参照のこと。

〔図表3〕 適応不良群の生徒のパウムと6名の評定者による評定結果の分析

〔図表3-1〕 生徒1の場合



項目 \ 評定	-2	-1	0	+1	+2
1	2	1	2	1	0
2	4	0	1	1	0
③	—	—	—	—	—
4	1	0	2	0	3
⑤	—	—	—	—	—
6	2	0	4	0	0
7	4	1	1	0	0
8	2	2	2	0	0
9	4	2	0	0	0
⑩	—	—	—	—	—
11	4	2	0	0	0
12	0	0	1	2	3

〔図表3-2〕 生徒2の場合



項目 \ 評定	-2	-1	0	+1	+2
1	4	2	0	0	0
2	4	1	1	0	0
③	—	—	—	—	—
4	4	1	1	0	0
⑤	—	—	—	—	—
6	4	2	0	0	0
7	4	2	0	0	0
8	1	3	1	1	0
9	2	4	0	0	0
⑩	—	—	—	—	—
11	3	3	0	0	0
12	0	0	3	2	1

(注) (i) ここに提示したパウムは、適応不良群の生徒として抽出した14名のうちの2名について例示的に示したものである。

(ii) その他の詳細な図表の見方については 図表1の下欄に示されている (注) : (iii)~(vi)を参照のこと。

者間にかんがりのずれがみられることが示唆されているわけである。

いずれにせよ、生徒のえがいた樹木画によっては、特定の項目について、評定者間にかんがりのばらつきを示すものもみられなくはないが、総じてみると、評定者間で相当にまとまりをもった評定が行なわれていることをうかがわせている。いうまでもなく、これらの樹木画についての個々の評定項目への評定に際して、評定者はそれぞれ独立に評定したうえでのことである。

つまり、評定者は、各樹木画を独立して評定しているにもかかわらず、ある程度の中心傾向のまわりにそれらの評定が集中する傾向にあることは、一応、これらの評定項目が、かなりの論議のうえで採択されたこともあって、まず妥当なものであったことを示唆しているように思われるのである。しかしながら、特定の生徒の樹木画の、特定項目の評定にさいしては、やはり、評定者間の個人差がかなり関与することも否定できない点に注目しておく必要がある。これらについては、評定に入っているまえに、評定者間で一定の基準ないし目安となるものを十分に論議して定めておく必要性が示唆された。

2. 評定項目ごとの吟味・考察

さて、上述の評定者による各項目の評定結果に基づいて、各群の生徒の樹木画のあいだに統計的に有意な差が認められるかどうかを吟味してまとめたものが表4である。(表の見方については、表4の下(注)を参照のこと。)

以上から、それぞれの評定項目についてみていこう。

〔表4〕 各評定項目についての3群間の分布と有意差の検定結果

番号	項目内容	段階		-2		-1		0		+1		+2		χ^2 - 検定
		群	総数 f, %	f	(%)	f	(%)	f	(%)	f	(%)	f	(%)	
1	樹木全体のバランスが、とれている～いない。	1 (N=9)	54 (9×6)	5	(9.3)	10	(18.5)	6	(11.1)	13	(24.1)	20	(37.0)	57.246 P<0.01
		2 (N=6)	36 (6×6)	9	(25.0)	11	(30.6)	10	(27.8)	4	(11.1)	2	(5.5)	
		3 (N=14)	84 (14×6)	41	(48.8)	20	(23.8)	10	(11.9)	11	(13.1)	2	(2.4)	
2	樹木がのびのびとした形で、描いてある～ない。	1	54	7	(13.0)	11	(20.4)	10	(18.5)	18	(33.3)	8	(14.8)	45.7098 P<0.01
		2	36	9	(25.0)	12	(33.3)	6	(16.7)	8	(22.2)	1	(2.8)	
		3	84	45	(53.6)	18	(21.4)	15	(17.9)	6	(7.1)	0	(0)	
③	樹木の中の付属物及び風景がある～ない。 ある場合— ①目立つ。 ②目立たない。	1	54	あ	る	6	(11.1)	な	い	48	(88.9)			27.5944 P<0.01
		2	36	あ	る	6	(16.7)	な	い	30	(83.3)			
		3	84	あ	る	42	(50.0)	な	い	42	(50.0)			
4	幹が異常にふくらみ、くぼみ、曲りが、目立つ～めだたない。	1	54	5	(9.3)	6	(11.1)	9	(16.7)	6	(11.1)	28	(51.8)	33.0078 P<0.01
		2	36	9	(25.0)	1	(2.8)	5	(13.9)	6	(16.6)	15	(41.7)	
		3	84	27	(32.1)	20	(23.8)	18	(21.4)	5	(6.0)	14	(16.7)	

⑤	幹の先端の処理について、ア開放，イ閉鎖，ウ不明確（判断しにくい）。	1	54	ア	0	(0)	イ	40	(74.1)	ウ	14	(25.9)	59.9952 P<0.01	
		2	36	ア	16	(44.5)	イ	8	(22.2)	ウ	12	(33.3)		
		3	84	ア	34	(40.5)	イ	13	(15.5)	ウ	37	(44.0)		
6	樹木が豊かに表現されている～いない。	1	54	8	(14.8)	8	(14.8)	14	(25.9)	14	(25.9)	10	(18.6)	51.5214 P<0.01
		2	36	10	(27.8)	7	(19.4)	14	(38.9)	5	(13.9)	0	(0)	
		3	84	47	(56.0)	13	(15.5)	18	(21.4)	6	(7.1)	0	(0)	
7	樹木が自然に近い形で、描いてある～ない。	1	54	14	(25.9)	10	(18.5)	11	(20.4)	11	(20.4)	8	(14.8)	52.3218 P<0.01
		2	36	19	(52.8)	6	(16.7)	8	(22.2)	2	(5.5)	1	(2.8)	
		3	84	66	(78.5)	12	(14.3)	3	(3.6)	3	(3.6)	0	(0)	
8	樹冠がきめ細かく描いてある～ない。	1	54	7	(12.9)	8	(14.8)	11	(20.4)	11	(20.4)	17	(31.5)	75.5508 P<0.01
		2	36	13	(36.1)	5	(13.9)	12	(33.3)	5	(13.9)	1	(2.8)	
		3	84	55	(65.5)	19	(22.6)	7	(8.3)	3	(3.6)	0	(0)	
9	幹と枝とがしっかりとした形で、描いてある～ない。	1	54	4	(7.4)	4	(7.4)	10	(18.5)	12	(22.2)	24	(44.5)	58.0638 P<0.01
		2	36	14	(38.9)	11	(30.6)	5	(13.9)	2	(5.5)	4	(11.1)	
		3	84	43	(51.2)	20	(23.8)	8	(9.5)	6	(7.1)	7	(8.4)	
⑩	樹木が画用紙の中におさまっている～いない。	1	54	い	る	45	(83.3)	い	ない	9	(16.7)	38.5226 P<0.01		
		2	36	い	る	12	(33.3)	い	ない	24	(66.7)			
		3	84	い	る	27	(32.1)	い	ない	57	(67.9)			
11	樹木をていねいに描いている～いない。	1	54	4	(7.4)	6	(11.1)	11	(20.4)	13	(24.1)	20	(37.0)	98.8668 P<0.01
		2	36	11	(30.6)	7	(19.4)	16	(44.4)	2	(5.6)	0	(0)	
		3	84	49	(58.3)	23	(27.4)	9	(10.7)	2	(2.4)	1	(1.2)	
12	幹の太さについて、太い～細い。	1	54	7	(13.0)	10	(18.5)	25	(46.3)	5	(9.2)	7	(13.0)	57.5418 P<0.01
		2	36	8	(22.2)	7	(19.4)	7	(19.4)	7	(19.4)	7	(19.4)	
		3	84	0	(0)	1	(1.2)	19	(22.6)	25	(29.8)	39	(46.4)	

(注) (i) 「群」の欄に記されている「1～3」の数字は、それぞれ、1＝適応良好群、2＝適応退学群、3＝適応不良群に対応する。

(ii) 項目③、⑤、⑩は、それぞれ5段階評価ではなく二者択一法または三件法で評価されている。

(iii) 評定者は、ここに選ばれた被験者（生徒）についての行動特徴などについては一切知らされていない。

(iv) 評定の「総数」は、1群（適応良好群）は9（名）×6（名）＝54、2群（適応退学群）は6（名）×6（名）＝36、3群（適応不良群）は14（名）×6（名）＝84 となっている。

(v) χ^2 -検定はすべて頻数によって行なわれた。

(1) 項目1 (「樹木全体のバランス」) について:

まず、項目1「樹全体のバランスがとれている～いない」についてみると、3群間に $\chi^2 = 57.246$, $df = 8$, $p < 0.01$ で有意な差がみられる。適応不良群 (「3群」) では「バランスがとれて『いない』」と評価されたものが (-2) と (-1) とをふくめて、72.6%に達しているのに、適応退学群 (「2群」) では55.6%, 適応良好群 (「1群」) では27.8%と減少し、著しい相違をみせている。逆に、「バランスがとれて『いる』」と評価されたものは、(+2) と (+1) とをあわせて、適応不良群で15.5%, 適応退学群で16.6%, 適応良好群で61.1%となっており、著しい増大がみられるのである。たしかに図表1から図表3までをみてもこのことは強く印象づけられるのである。そして、この傾向は、適応退学群が適応不良群に類似した傾向にあり、適応良好群がそれらとは逆の傾向を示していることに帰因していることをうかがわせる。

こうした事実は、適応不良群や適応退学群が、適応良好群に比して、なんらかの形で、自己定位 (self-orientation) のあり方が不確定であることを示唆するもののように思われる。つまり、適応不良群の場面には、そうした不当適応にいたらしめる内的・外的 (環境的) な要因が自己定位のあり様を不確定、不安定なものにしていることが予想されるし、一方、適応退学群の場合には、すでに記載したように、家庭の経済事情などからくる緊張感が高く、自己定位を脅かしていると考えられる側面を示唆しているかの如くに思われる。その点、適応良好群においても、大なり小なりそうした自己定位のあり方に困惑しているものも見受けられるだろうが、なんらかの形で、そこから派生する当惑感や緊張感をうまく acting-out する手段、社会的に容認された形での昇華の仕方を身につけているのかもしれない。いずれにせよ、適応良好群に比べて、適応退学群と適応不良群に、「樹木全体のバランスがとれて『いない』」ものがかなり顕著にみられる事実は、生徒指導のあり方と関係して考える場合、示唆に富んでおり、内面の不安定さや、外的環境からくる自己定位の不確実感や緊張感を社会的に容認された形で解放できる手段としての行動を身につける方向への指導や助言を必要とすることを含蓄しているように思う。

(2) 項目2 (「樹木全体がのびのびえがかれているか」) について:

項目2「樹木全体がのびのびとした形で描いて『ある～ない』」についてみてみると、「のびのびとえがかれている」(+2) と (+1) とと評定されているものは、適応良好群で48.1%であるのに対して、適応退学群では25.0%, 適応不良群では7.1%である。逆に、「のびのびとえがかれていない」(-1) と (-2) ものは、上記の順にそれぞれ、33.4%, 58.3%, 75.0%と増大していく傾向にある (3群間の検定の結果は、 $\chi^2 = 45.7098$, $df = 8$, $p < 0.01$)。

これについても、やはり、項目1の場合と同様の解釈が妥当すると思われる。

(3) 項目3 (「樹木の中の付属物と風景」) について:

項目3「樹木の中の付属物及び風景が『ある～ない』」については、付属物や風景が『目立つ～目立たない』の二者択一法で評定した結果、3群のあいだには、 $\chi^2 = 27.5944$, $df = 2$, $p < 0.01$ で有意な差が認められている。ここでは、適応良好群と適応退学群とに付属物や風景をえがかないものが圧倒的に多く (それぞれ88.9%と83.3%), 適応不良群に付属物や風景をえがくものが半数程度 (50.0%) いることが目立っている。Koch の解釈仮説によると、風景については、「気分が酔っている」、「ばかっている、放蕩」、「自己忘却」、「浮動状態」、「現実

からの逃避」,「現実的深みのない直観」,「我を忘れて印象のままになる」,「刹那的に生活する」,「えたいのしれない力をコントロールすることができない」などの傾向のあることを示唆するとともに、逆に、「ひかえ目」,「ゆっくりしている」,「のんびりしている」,「平静」,「でしゃばらない」などの傾向をも同時に示唆している。

一方、付属物については、「わるふざけ」,「からかい」,「ひやかし」などの傾向を示唆している点からみると、この項目3について、その傾向が目立つものは、付属物と風景とを同時に考慮するとき、自己の置かれている現実を直視することを避けて、現実と隔絶したような自己忘却、忘我的状態になり、印象に支配されて行動し、あたかも浮動状態のように、放蕩的、刹那的に行動することが暗示される。

このようにして、この項目3の顕著なものが、適応不良群において、他の2群より、より多く出現することは、一応、理解可能であろう。

(4) 項目4 (「幹部のふくらみ、くぼみ、曲り」)について:

項目4の「幹が異常にふくらみ、くぼみ、曲りが『目立つ～目立たない』」という点に関しては、3群間に統計的に有意な差が認められる ($\chi^2=33.0078$, $df=8$, $p<0.01$)。

この項目の場合には「目立たない」傾向が(+)の方向に「目立つ」傾向が(-)の方向に評定されている。適応良好群では、「目立たない:(+2)と(+1)」が62.9%, 適応退学群では58.3%, 適応不良群では22.7%であるのに対して、「目立つ:(-2)と(-1)」ものは、上記の順にそれぞれ、20.4%, 27.8%, 55.9%となっており、適応良好群と適応退学群とでは類似しているが、適応不良群だけが著しく上記2群と異なっていることを示している。

つまり、内的なものであるにせよ、外的状況から派生したものであるにせよ、適応不良群において、わだかまり、流れが妨げられている状態が比較的顕著であって、感情の蓄積、うっ積が示唆されている点に注目したい。Kochも指摘しているように、この表現の意味するところは、腸のようにそのなかを何かが通り抜けていくことを想像すると最もよく理解されるとされている。くびれは流れを妨げるが、ふくらみはそこにものがとどまり、たまって、それが流れをとめてしまうということが明らかになるとしている。かくして、感情の蓄積、抑圧された感情が示唆され、それが抑制されているか、爆発的に表出されるか、それとも退行的な形をとるかは別としても、感情の充満、息詰まりという点では関心を寄せるべきサインと解することができる。適応不良群にこの傾向が比較的顕著であることは行動との対応づけを行なってみると一応肯ける側面を投影しているとも考えられるだろう。

(5) 項目5 (「幹の先端の処理」)について:

項目5「幹の先端の処理」の様式については、(ア)開放、(イ)閉鎖、(ウ)不明確の三件法で評定してみた。その結果は、3群の間に統計的に有意な差があり ($\chi^2=59.9952$, $df=4$, $p<0.01$)、閉鎖型のパターンは適応良好群に多く、開放型のパターンは適応不良群と適応退学群にほぼ同じ傾向の比率でかなり多いことを示している。

“開いた形”のものについて Koch は詳細に論議しているが、その中の代表的な解釈仮説的言及をみてみると、態度の決定をさしひかえ、問題を未解決のままにほうっておくとか、自分に義務を負わさない人の場合にみられるとする。つまり、人と社会、自己と自己が住んでいる世界とのあいだにはっきりした関係が確立されていないことを示唆するとされている。反面、

“ひらかれた”心をもって事物に接近するという傾向を示唆し、探究者のであるが、この未知なるものに突っ込んでいこうとする衝動は、目的がなく、陽気で、漂々としていることにつながり、どんな目に合っても熱狂的にそれを受け入れることにさえなるとしている。したがって、現在に確固とした考えをもたず、自分に責任を課すことを好まず、あらゆるものを先延ばしにする場合にも開放型はみられるのである。自意識がなく、自分の立場が理解できず、目標をもたず、あっても確かなものでないとも考えられている。

他方、この開放型は、“未来はいったいどうなるのだろうか”と、避けられないか、はっきりしない運命におびえている人が体験する恐れ of 感情と結びついている。そして、ときには、運命に期待をかけながらも、どんな方法や形でそれが与えられるのかを知らされるとみじめになるような人がもつ期待とも結びついているとされている。

このようにみえてくると、この開放型のパターンが、その行動の特徴からみて適応不良群に多いこと、同様に、主として経済的事情のために適応的でありながらも退学せざるをえなかった適応退学群にもかなり多く出現することは、一応、理解可能であると思う。

(6) 項目6 (「樹木の豊かさ」) について:

項目6の「樹木の豊かさ」についてみると、 χ^2 -検定の結果、 $\chi^2=51.5214$, $df=8$, $p<0.01$ で、適応不良群が豊かさに欠け、適応良好群に豊かな表現をするものが多いことが示されている。

樹木の成熟度、豊かさが欠如していることは、やはり、内面的な感情や情緒の豊かさと関連するとともに、部分的には知的にも未成熟な面をうかがわせ、総じて、適応不良群において人格の未熟さを示唆する傾向が強いように思われる。こうした点からも、適応不良の傾向を示す生徒への教師の接し方に、種々の側面から再考すべき面のあることが想定されるのである。

(7) 項目7 (「自然に近い形での描出」) について:

項目7の「樹木が自然に近い形でえがかれているかどうか」についても、上記の項目6とほぼ同様の傾向が認められる。統計的にも、 $\chi^2=52.3218$, $df=8$, $p<0.01$ で、有意に、適応不良群の方に自然に近いものでない、現実性の欠如した樹木描出の多いことが認められる。やはり、現実吟味の力に乏しく、自己と現実との関係の吟味の不十分さ、自己受容の能力の低さを示唆するもののようにつながるのである。

(8) 項目8 (「樹冠の描出のきめの細かさ」) について:

項目8の「樹冠がきめ細かくえがかれているかどうか」についても、項目6や項目7と類似した傾向を示している。統計的にも、 $\chi^2=75.5508$, $df=8$, $p<0.01$ で、「きめ細かくえがかれていない」ものが、適応不良群に有意に多いことを示している。

こうした傾向についても、先に記述した項目6や項目7の場合とほぼ同様の解釈が成り立つものと思う。同時に、樹冠は、自己と環境との接点とも考えられるので自己なり自我なりを自己のおかれた環境にどのように表出するかに関連すると考えられる。そうした点で、樹冠がきめ細かさに欠け、粗雑に描出されることは、自己を環境に表出するさいのあり方が粗野であったり、十分に制御されない形で表出されたりすることを示唆するものとも解することができる。

ここにおいてもやはり、適応不良群の生徒について、その表現型としての行動にのみ注目することなく、先ず、彼らの内面的理解につとめ、社会的に容認された形での不満やエネルギー

の解放を考えていく必要がある。

(9) 項目9 (「幹と枝がしっかりした形か」) について:

項目9の「幹と枝がしっかりとした形でえがかれているかどうか」についてみると、適応良好群では(+2)と(+1)と評定されているものを含めて66.7%に達しており、「しっかりとえがかれている」ものが多いのに対して、適応退学群では(-2)と(-1)とを含めて「しっかりとえがかれていない」ものが69.5%、適応不良群では65.0%に達しており、適応良好群と他の2群とのあいだには全く逆の描出パターンを示していることがうかがえる。(統計的にも、3群間には、 $\chi^2=58.0638$, $df=8$, $p<0.01$ で有意差が認められる。)

やはり、自己と環境、自己と現実とのあいだの境界の不確実性が示唆されており、不安定さ、不全感などが適応良好群に比して他の2群に顕著なことがうかがえるのである。

(10) 項目10 (「画面におさまっているかどうか」) について:

「樹木が画用紙の中におさまっているかどうか」(項目10)については、二者択一的方法で評定された。統計的に有意な差をもって ($\chi^2=38.5226$, $df=2$, $p<0.01$), 画面からはみ出した樹木が適応退学群と適応不良群に多いことが認められるのである。

樹木の描出が、画面におさまっているかないかは、示唆的には、所与の環境に個人が順応するか、そこから逸脱する傾向があるかを含蓄するものと思われる。そうした見地からすると、ここにみられる傾向は一応理解できるように思われる。やはり、自己のおかれている現実や環境を受容できるかどうかに関連しているのだろう。適応不良群と適応退学群において「おさまっていない」ものが相当に多く見受けられることは、このようにして欲求不満耐性の低さや現実吟味 (reality-testing) の部分的欠如を物語っているのではないかとと思われる。

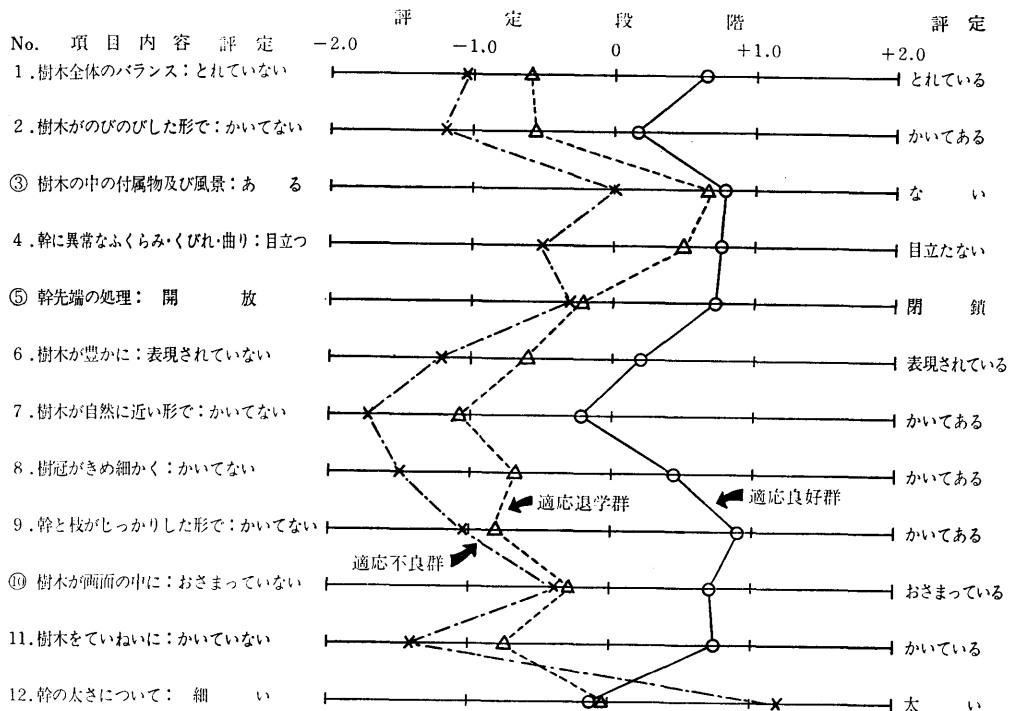
(11) 項目11 (「樹木描出のていねいさ」) について:

「樹木をていねいにかいているかどうか」(項目11)についてみると、ここでもやはり、3群間に有意な差が認められる ($\chi^2=98.8668$, $df=8$, $p<0.01$)。適応良好群では「ていねいにかいている」ものが多いのに、適応不良群では「ていねいにかいていない」ものが目立つ。傾向的には、項目8 (きめ細かくかいているかないか) や項目9 (しっかりとした形でかいてあるかないか) などと類似的、相関的な様相を示唆しており、粗野性の有無、根気の有無、耐性の有無などに関連があるように思われる。

(12) 項目12 (「幹の太さ」) について:

「幹の太さ」についてみると(項目12)、ここでも3群間に有意な差が認められ ($\chi^2=57.5418$, $df=8$, $p<0.01$), 非常に太い幹で描出しているものが適応不良群において相当数にのぼることが示されているのに、中間程度の適度な幹の太さ (評定段階で「0」) のものが適応良好群で多いことが認められる。

示唆的には幹の太さは“自我の拡張・肥大～収縮・萎縮”と関連があるように思われる。このような視点からみると、適応不良群に幹の表現が非常に太いものが多いことは、自我意識や自我感情の過大な拡大や肥大がややもすると集団規準から逸脱した行動異常にいたらしめる側面のあることが部分的には理解できる。その点、適応良好群では幹の太さが「適度なもの」(「0」の評定段階のもの) に集中している事実、不当に自我拡張的であったり自我収縮的であったりすることのないことを物語っており、具体的な行動表出に際してもそうした点が反映



〔図4〕 3群の5段階評価の平均値によるプロフィール

- (注) i. 評価項目の番号 (No.) に○印を付したもののうち、③は二者択一的評価について、「ない」ものを (+1)、「ある」ものを (-1) として平均してプロフィールを作成した。⑤については、三件法の評価を、「閉鎖」を (+1)、「開放」を (-1)、「不明確」を (0) として、平均して一応のプロフィールをかけた。また、⑩については、「おさまっている」を (+1)、「おさまっていない」を (-1) とし、二者択一法で評価されたものを換算して平均し、一応、プロフィールをかけたことをことわっておく。
- ii. その他の項目は、5段階評価のものを平均して各群のプロフィールをえがいた。

されることを想定すると、一応、妥当な結果を暗示しているもののように思われるのである。

3. 各群間の全体的特徴の比較

最後にこれら3群の全体的な特徴について比較検討を加えてみることにしたい。

図4は表4の結果から平均値を求めて、プロフィールとして図示したものである。(ただし、その処理の仕方については、図4の下(注)を参照のこと。)

全体的に注目されることは、やはり、適応良好群では、一般的にのぞましいと予想される方向にプロフィールをえがく形になっているということである。適応不良群においては、逆に、一般的にみて消極的に解釈される方向にプロフィールをえがいている。

適応退学群は、3群のなかでも最も注目をひくプロフィールをえがいている。ある項目では、適応良好群に類似した様相を示すが、別の項目では適応不良群に近い様相を示すとともに、さらに別の項目では良好群と不良群との中間的な様相を示すといったぐあいになっている点は、

この適応退学群が、その行動特徴からみて、学校や家庭において適応的でありながら、やむをえざる外的条件としての家庭的経済事情のために退学のやむなきにいたっている点を考慮すると理解可能なのではないかと思われる。つまり、家庭的経済事情というものが外的圧力となって、それが、特定の項目については適応不良群と類似する様相をもたらさせることになり、かなり情緒的緊張などの高まる状態にいたらしめる点が注目される。こうした点について、研究したものの立場としてみると、意欲的に学習にとりくむ生徒に、もっと安定した状態で学習に打ち込める社会的、経済的バックボーンが樹立されることを望んでやまないものである。

もちろん、この適応退学群では、適応良好群にきわめて類似した様相を示す項目もある点は注目されてよからう。バウムテストの項目の中には、このように、種々の行動の規定因を比較的敏感に反映するものもあれば、そうでないものもあること、あるいは、外界の理解や受けとめ方にあまり支配されず、潜在的、内的なものを反映するものもあるのかもしれないことが考えられる。

一方、適応不良群についてみると、彼らにもまたそうした適応不良にいたらしめる外的要因や内的要因がすでに存在するかもしれない。それが、複雑に結合し絡み合って行動異常となるのだろう。そのことがバウムテストのここでとりあげた項目に反映されているものと思われる。したがって、そうした不適応行動にいたらしめる外的要因の排除を考慮するとともに、彼らの内的状態に応じた教師や親の接し方なども示唆されていると思うのである。さらにまた、他方では、現在の高校生一般にいえることかも知れぬが、ひとりひとりの生徒について、欲求不満耐性 (frustration tolerance) を現在以上に高めるような指導や助言の必要な面も同時に考えられるであろう。

いずれにせよ、以上にみてきた12項目について、これら相互のあいだにはかなり相関度の高い項目もなきにしもあらずで、これについては反省点として今後さらに検討していかなければならないだろう。しかし、他方、ここにあげた項目は、実際高校生の教育実践にたずさわっている高校教師、しかも、必ずしも心理テストについて十分な知見のないものによって作成されただけに、非常に注目をひくものだと考える。そして、そういう状況にありつつも、これら3群のあいだにかなり注目に値する群差の出ている点は一応評価してもよいものと思う。

そこで、以上にあげた12項目にみられる評定を通しての3群間の樹木描出パターンで、適応不良群にとりわけ顕著に示された特徴をみると、すでに、各項目の考察で言及したことに加え、Koch の解釈仮説に照らし合わせてみると、「抑制、固執、爆発性、感情の蓄積、衝動的、散漫、陽気、軽率、移り気、持続性の欠如、独断的、神経質、不健全、不健康的」などが示唆される。また、樹冠に関していえば、「樹冠の粗雑性は、生産性や集中力に乏しく、方向性がない、安定性の欠如、意志の弱さ、首尾一貫性のなさなどが示唆されている」のである。

このようにして、今回行なった調査は、対象とした人数が少数ではあったが、青年中期（高校時代）にみられる行動特徴の一端を示しているようにも思われる。よくいわれるこの時期の特徴としての「衝動的」、「快楽的」、「短絡的」な行動が教育臨床的にみると示されやすく、今後の教育的指導への示唆を与えてくれたように思う。

そして、ここに行なった投影法のひとつであるバウムテストに示される描出パターンと行動的特性とが一応対応していることは、今後教育の場での集団指導の中で、個々の生徒の行動の

結果のみに対処する指導のあり方よりも、むしろ、事前いくつかの性格テストなどを複合的に実施して、生徒の内面的理解のための仮説設定を行ない、それを基礎として行動観察等によってこの仮説の検証を行なって、表現型としての行動と元型としての情緒的・性格的側面との関連の理解に努めつつ、学習指導や生徒指導を行なうことはそれなりに重要な意義をもつものと考ええる。

4. 今後の検討のための経験的示唆

以上に報告してきたもののほか、我々は、これまで高校生を対象としてバウムテストを実施して吟味検討を加え、生徒指導のための補助的手段としてきた。これは、これまでに記述してきたように、個々の生徒の内面的理解にとってこのバウムテストが多面的に有効であること、また、入学当初などの早期に個々の生徒の内面を理解して、不適応行動にいたらぬうちに十分に対応できるようにしたいことなど、教育的配慮に基づいているところが大きい。

これまでの我々の臨床的経験や教育的経験に基づく、一般に心理テストの利用の仕方には大別して2つの方向があると考ええる。

そのひとつは、仮説設定的利用法ともいうべきものである。たとえば、小学校から中学校へ進学した場合、生徒の学習指導や生徒指導のために資する公的教育情報とでもいえるものは指導要録であろう。しかしながら、これまでの我々の経験に基づく、これだけでは生徒理解に十分でなく、具体的な生徒像がうかびにくいこともある。こうした場合に、例えば心理検査を利用して生徒の内面的理解をすることはそれなりに意義をもつものといえる。ただし、配慮すべき点は、心理テストを介しての生徒理解は、この場合には、仮説設定的であるということである。“この生徒の内的状態はおそらくかくしかじかであろう”と仮説することである。したがって、この仮説のもとに、いろいろの状況での生徒の行動特徴を十分に観察してみることである。そして、このテストを介しての仮説が妥当であるかをたしかめつつ行動と内的状態との関連を理解し、より一層、当該生徒を向上させるには、どのような外的問題点を改善・排除していくべきか、内面的にはどのような点の改善に努めるべきかを考えていくことが重要であろう。これが、ここでいうところの心理テスト利用のうち仮説設定的利用法というものである。

今ひとつは、仮説検証の利用法とでもいうべきものである。教師は、ふつう、何名かの生徒を担任し、そこから、相互比較的に生徒の不適応行動を理解するというすぐれた能力をもっている。同時に教師は、教職経験を重ねるにつれて、こうした才能を十分に発揮するという側面をもっているのである。しかしながら、この場合、ややもすると主観的に墮する危険性を内包している点に注意を払わなくてはならない。経験的であることは、それなりに科学性をもつが、直観的、主観的になることもなきにしもあらずだからである。

そうした場合に、心理テストは力を発揮してくれることがある。つまり、教師の経験に基づく生徒理解は、その段階では仮説設定的であって、これをさらに補強ないし証拠づけるために心理テストを利用するのである。この場合の利用法は、生徒の行動観察にもとづく内面的理解のための仮説設定が過去の教職の経験に基礎づけられてまず存在しており、この経験的、主観的仮説にあやまりがないかを検証するために、科学的、客観的手続きをふんだ心理テストを利用して、主観的仮説の誤りの有無を検討するとともに、より客観的で強固なものにすることも

〔表5〕 高校生の特徴的行動パターン型と樹木画描出パターンの特徴との関係

特徴的項目	行動パターン型 活動性（外向性） タイプ	消極性（内向性） タイプ	非行性（反社会性） タイプ	不安定性（神経症的、病的、非社会性） タイプ
全体表現：	おおざっぱ、雑、力強くかく。	きめ細かく、几帳面にかく。繊細である。	不均衡。	樹木全体が灰色でありながら、枝・実・葉なども明確にかく。樹木全体が何かの物に象徴された形でかいてある傾向がみられる。
幹：	太く、先端開く。	細い。先端閉鎖が一般的である。	異常にまがったり、かたむき、極端な傷、切りこみ。一般に太くかく。	幹の表面に特徴づけられる物を大きく象徴的にかいてある。幹が異常な形で切断されている。
枝：	太く、先端開く傾向あり。枝先、樹冠は大ざっぱにかく傾向が強い。	細い。先端閉鎖。樹先・樹冠はきめ細かくかく傾向が強い。	とげとげしいかき方。極端に太くなったり細くなったりする。トナカイの角のような枝がみられる。	鋭くかいてあったり、破線でかいてあったり、極端な曲り、ふくらみなどがみられる。
風景：	あることが多い。	あまりかかない。	殺伐的なものが多い。	風景はないが、複数の木をかいたり、倒れかけた木、裂けた木、木に時計、人間の体の一部を表現したりする。
画面に対して：	はみ出す傾向がつよい。	中におさまっている。いずれか一方にかたよってかく傾向がつよい。	画面に関係なく樹木を表現する。	面画の中におさまっている。
付属物：	一般にかいていることが多い。	あまりみられない。かいていない。	いろいろな物をかき込む。	
実・花・葉：	少ない。	多くかいてある傾向がみられる。	極端に大きくかく。	
強調：	幹。	枝・樹冠にある。	線を非常に強くかいたり、極端にうすくかいたりする。影を濃くする。	特に一部分を極端に誇張したり、みえないものが見えるように表現したりする。単調な同一パターンで表現する傾向がみられる。

忘れられてはならないのである。そのうえに立って、生徒のより一層の向上にむかって、指導、助言、援助を行っていくのが妥当だと思われる。バウムテストに限らず、一般に心理テストの利用法にはこうした2つの側面のあることが示唆されるように思う。

以上のような視点に立って、ここで報告したバウムテストの結果について、さらにまた今後の検討のために、我々の経験的示唆に言及しておきたいと思う。

これまでの我々のバウムテスト利用の経験と、教育的ないし臨床的経験にもとづく高校生の行動分析との結果、生徒の特徴的な行動パターン型は、大別しておよそ次の4つのタイプに集約されるように思う。すなわち、

- (i) 活動性（外向性）タイプ
- (ii) 消極性（内向性）タイプ
- (iii) 非行性（反社会性）タイプ
- (iv) 不安定性（神経症的、病的、非社会性）タイプ

であって、これらと、バウムテストにみられる概略的特徴との関連を示すと、表5のようになる。

この表に示されているものは、我々のこれまでの経験から、現段階ではかなり積極的に示唆できるものであるように考えている。しかしながら、今后さらに資料を累積して十分に検討吟味を重ねていく必要性のあることはいうまでもない。そして、先に述べた心理テストの利用法についての2つの視点をたえず着実に踏まえつつ、かつ、生徒に種々の形で還元して、よりのぞましい方向に向かわしめるのだということを基本的前提として見失うことなく、さらに検討を重ねていく必要性を感じている。

V. 結 論 と 要 約

1. これまでの教育経験や臨床経験に照らして、バウムテストが生徒指導の上での生徒の個性理解に資するところ大であり、かつ、不適応行動の早期発見にも有効であるとの示唆から本研究を行なった。
2. 今回は、生徒の適応・不適応とバウムテストでの樹木画描出パターンとの関係を、教育実践の場に適用可能な形で吟味検討することが目的であった。
3. 高校生を対象として、入学当初にバウムテストを実施、それを2年間保存したのち、一方ではこの2年間のあいだ、生徒の行動観察ないし行動調査を行なって、この行動特徴から、適応良好群、適応退学群、適応不良群に該当する生徒を抽出し、バウムテストの樹木画描出パターンとの関係をみることにした。
4. バウムテストでの樹木画描出パターンの評定にさいしては、教育実践の場に即するように、高校教師数名による討議の結果、12項目にわたる評定尺度を作成した。
5. その結果、評定者間の一致度は各項目についてかなり高かった。そして、各行動特徴群（上述3群）間と樹木画描出パターンとのあいだには有力な関係がみられた。これらの結果は、Kochの解釈仮説などを介して解釈してみたところ妥当なものであった。
6. 以上のことから、心理テスト一般についての利用法のあり方についても言及がなされた。

すなわち、仮説設定的利用法と仮説検証の利用法である。そして、これらの利用法に基づく結果が、種々の形で、テストを実施された生徒の方へ還元され、指導、助言、援助に役立てるべき必要性に言及した。

7. 最後に、これまでの教育的、臨床的経験から、高校生の場合について、特徴的な行動パターンの類型と樹木画描出パターンの特徴との関係が、概略的、一般的に示唆された。これについては、今後の検討をさらに必要とすることが言及された。

参 考 文 献

- 林 勝造・一谷 彊（編著）（1973）baum・テストの臨床的研究 東京：日本文化科学社
- 林部伝七（1974）美術教育の基礎原理 東京 学芸図書
- コッホ著；林勝造・国吉政一・一谷彊訳（1970）baum・テスト——樹木画による人格診断法——東京 日本文化科学社
- Koch, K. (1948) Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Bern: Hans Huber.
- Koch, C. (1959) The Tree Test: The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis. Bern: Hans Huber.
- V. ローウエンフェルド著；竹内 清・堀内 敏・武井勝雄共訳（1974）美術による人間形成 名古屋：黎明書房
- 上 昭二・大勝恵一郎（1970）美術教育の構造 東京：学芸図書
- 横山基弘（1977）baum・テストにみられる高校生の地域的特徴 関西心理学会第89回大会発表論文集（於京都大学文学部）

SUMMARY

The present study was designed to discover and make clear the mechanisms of maladaptive behaviors of students in earlier stage of senior high school and to well guide them.

During the orientation period immediately after school entrance, Koch's Baumtest (Tree-Drawing-Test) was administered to the students. The data was preserved for two years, and during these two years, the teachers who rated these data was not allowed to overview them.

On the other side, these teachers observed the students' behaviors for these two years, and drew (or sampled) the three groups of students: the Well-Adaptive, the Well-Adaptive but Left-School-Halfway with Home-Economical-Circumstances, and the Maladaptive.

After the two years passed, the teachers rated the data of the tree-drawing-patterns of Koch's Baumtest drawn by the tree groups of students. The rating scales were consisted of 12 items, which were constructed through intensive discussion by these

teachers and could be evaluated with experience of educational practice and without psychological knowledge. The tree-drawing-patterns were also evaluated (or rated) by whole (or total) impressions of the teachers.

After these procedures, the data of the tree-drawing-patterns above mentioned were related to the characteristic behaviors of each group of students.

The results were very suggestive and well supportive of discovering maladaptive behaviors in earlier stage of senior high school grade. These results were also discussed through Koch's interpretation hypotheses. At the same time the methods of utility of psychological tests were discussed from the view of practical level of senior high school education.

〔付記〕 本研究にさいして、大阪府立交野高等学校（全日制）及び寝屋川高等学校（定時制）の各校の先生方と生徒のみなさんに御協力をいただいた。ここに付記して深甚の謝意を表する次第です。